

(9 4) 栃木県藤原の上滝鉱山跡

参考文献(1)には本の題名通り関東地方の鉱山を数多く紹介している。が、当該の鉱山図、地形図が添付されているのは極々僅かである。その中で、本鉱山の紹介文は5行だけである。大凡の位置が文章で述べられている。大規模な鉱山跡ならば、短い位置紹介文でも、たどり着くのはそれ程困難ではない。が、多くの鉱山は小規模なものである。放棄され廃鉱山となって久しい鉱山は、周りが完全に自然に還り、再発見するのは極めて難しい。しかし、あれやこれやの探査の努力をすれば、再発見ができる場合がある。ここで紹介する、上滝鉱山跡はその1例である。

参考文献(2)を入手することができた。参考文献(1)で記述された位置当たりの山の斜面中に鉱山記号があり、「上滝鉱山」の文字も記されていた。これで、ようやく上滝鉱山跡の位置の把握ができた。図1中の龍王峡ライン(有料道路)西側の斜面中である。この参考文献(2)を手引きに、現地へ探査に出かけた。現地は杉林となっており、林道もあったが、鉱山跡らしいものは確認できなかった。ただ、斜面の上方に立っている鉄塔の少し下に、ぼつんと祠があった。小さな鉱山では、鉱山の安全・商売繁盛・感謝等を期して、祠を祭っている場合がある。その例なのかと考え、祠近辺を良く探査したが、何の成果も得られなかった。終了。

ネットで調査をしたところ、鉱物情報という冊子に「栃木県上滝鉱山探訪記」があるのを見いだした。つくば市の地質調査所図書室が所蔵しているとのこと。閲覧し、コピーをいただいた。参考文献(3)である。13年前の訪問記である。鉱山跡は、参考文献(2)の鉱山記号の場所とは全く違っていた。近傍であるが、山の斜面中ではなく、沢の上流である。参考文献(3)を手引きに、再探査に出かけた。文献の案内通りに進んで、鉱山跡を確認することができた。ズリ跡で鉱石も見いだすことができた。

鉱山跡への経路は次の通りである。今市から鬼怒川に向かって、121号を北上していく。鬼怒川温泉街中で、有料道路の龍王峡ラインに入っていくが、料金ゲートの手前で、左側にある道に入っていく。従って料金を払う必要はない。300m前後進んだ所当たりで、適当に駐車することができる。ここから汲戸ノ沢(汲井戸沢)に沿って歩いて行く。直ぐに砂防ダムに出会う。沢は広く平坦である。10分ほど歩くと、沢底の高さで、進行方向左側(沢の右岸)に、坑口跡がある。坑木が朽ちながらも、未だ坑道入口の原形を保っている。一見の価値がある。

探査日 2011年11月

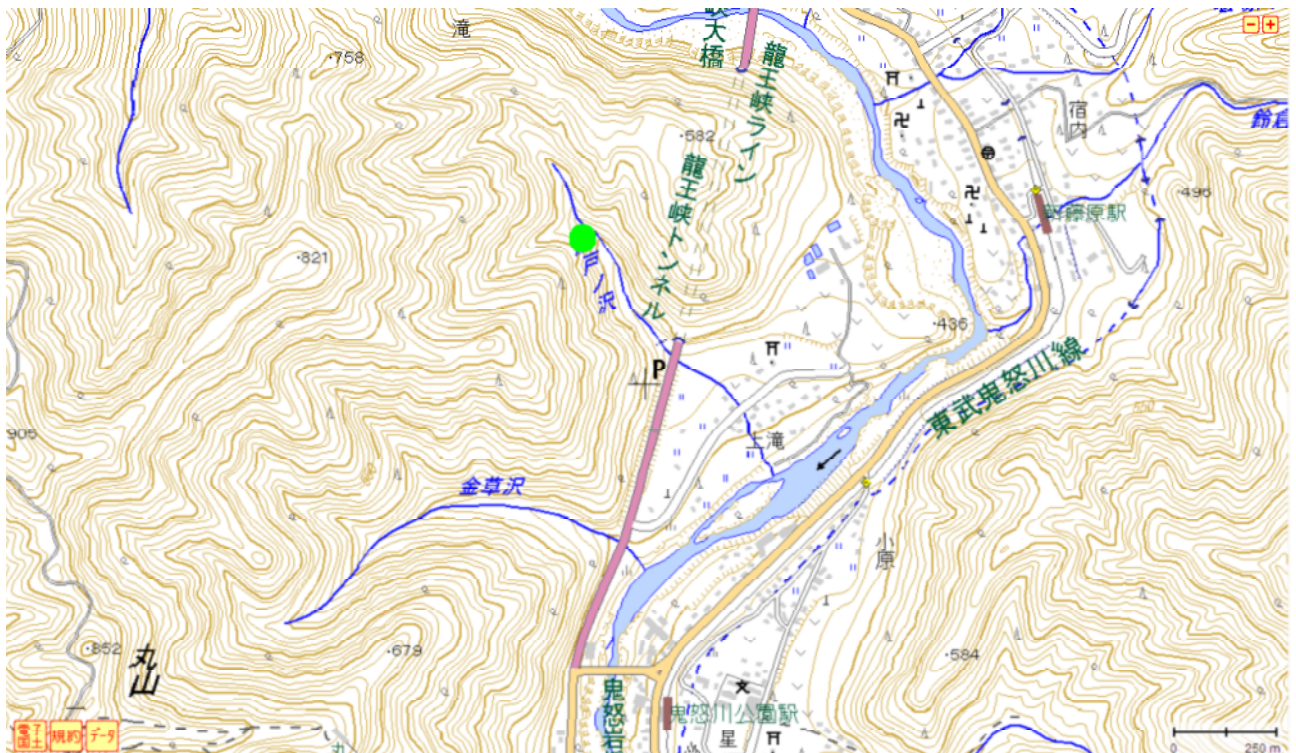


図1 国土地理院の地図サービスホームページより複写掲載。文字Pが車を駐車させた位置。緑丸が汲戸ノ沢の右岸にあった坑口跡。

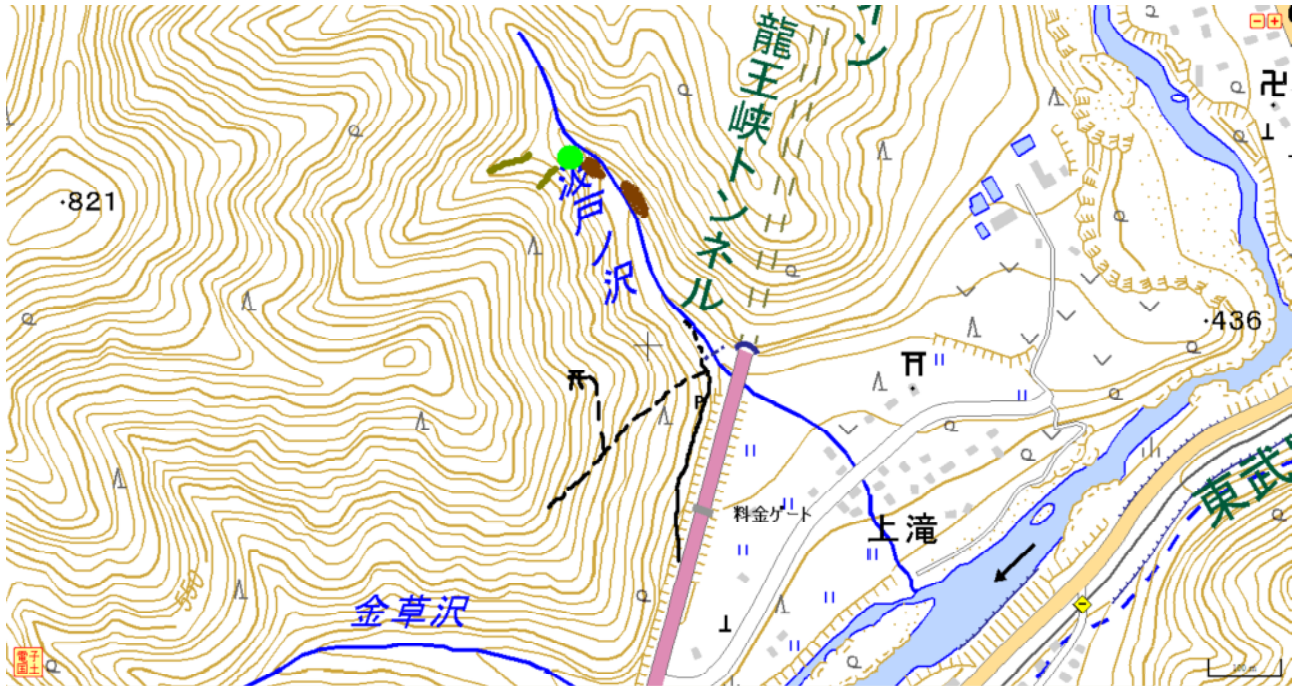


図2 図1の部分拡大図。料金ゲートの手前で、左側の道路に入っていく。適当な所で駐車ができよう。汲戸ノ沢を遡っていく。緑丸が坑口跡。茶色が小さなズリ跡。金色線分が露頭鉦脈。沢に入って10分前後で、坑口跡に達しよう。

神社記号は石製の祠のあった位置。祠の側面には文字らしい彫込み跡があったが、判読はできなかった。杉林内に林道がある。それを登っていけばよい。

鉦山跡写真



写真1 龍王峡ラインの料金ゲートが先に見える。このゲートの手前の左側の道に進んでいく。



写真2 汲井戸沢の砂防ダム。



写真3 砂防ダムの上流の沢の様子。先に進んでいく。



写真4 沢の右岸にあった坑口跡。写真に向かって左側当たりにズリがある。



写真5 坑口の接近写真



写真6 祠の写真。祠の後方に、送電鉄塔の脚部が見えている。

採集鉱物写真



写真7 露頭鉱脈中あった鉱石。粘土化した母岩中に黄鉄鉱の微晶がかたまっている。写真だけ採集。



写真 8　ズリ跡で。母岩に含まれた黄鉄鉱微晶鉱石。これも写真だけ採集。

付記　古い紹介文、地図などを参考にして、未訪問の鉱山跡を訪れる場合には、鉱山位置の記載に、間違いがあるかも知れないことに、留意しておいた方が無難である。意図的にやるとは思えないが、記載ミスがある場合がある。

参考文献

- (1) 「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢 編者、112 頁、朝倉書店、1973 年。
- (2) 「塩原図幅地質説明書」、地質調査所、1955 年(昭和30年)。
- (3) 「栃木県上滝鉱山探訪記」、加藤、寺島、渡邊、鉱物情報、122 号、4 頁、鉱物情報編集部、2000 年。